

どんな健康食も危険つきもの

人生のリスク

リスク研究

中西 準子

(産業総合研究所
安生科学研究所部長)

⑤

95年には横浜国立大学に移りリスク研究が本格化しますね

提訴の話では水俣病訴訟で有名な後藤孝典さんを中心に吉田瑞彦さん、荏原洋子さんで弁護団を作っていたと言いました。裁判の話のためかは分かりませんが、助教の話も来て、衛生工学以外の先生から同情的な声もいただいております。結局提訴には至っていません。東大を昇任後すぐ辞めたのも、恨んでいたのではなく、長くいたしもういいかという気持ちでした。横国大では当時の文部省からポスト純

増を認められ、化学物質のリスク評価を進めました。

——反発もあったのでは

現代の問題は水質を守れば流量が守れない、魚を食べれば心臓病リスクは減っても発がんリスクは増える、という話。お金だつて有限で、環境以外にも貧困などの問題でもお金が必要。私は幼いころ貧乏も経験し、学生時代は環境よりむしろ貧困に関心があった。だからどこまでなら環境の犠牲は許されるかという指標作りを考えましたが、それが市民運動から反発

側につくような態度になるのか!」と非難されたことを今でも覚えています。市民運動の人たちとは公害問題で協力関係にもあったわけで、複雑な思いでした。

——リスク論が認められたきっかけは何だったのでしょうか

90年代後半、焼却炉からのダイオキシンが騒がれました。でも私たちが日本人のダイオキシン摂取量を調べると、野菜や大気の2倍以上が魚から体に入っていた。

実は88年ごろか農薬中の不純物のダイオキシンには注目しており、農薬中のダイオキシンが水中に流れて魚に移行したのではと考えました。でもメーカーは否定するし、農薬を調べてもダイオキシンは検出されない。昔の農薬では高濃度だったのではと疑っても、企業も研究所も当然サンプルをくれない。そんな時、研究メンバーの一人が農家の物置を調べようと言いました。検査したら高濃度のダイオキシンを検出。製造時期で並べると、ベトナム戦争で枯れ薬剤が批判されたところから濃度が下がってきています。メーカーが知っていたかまでは分かりませんが、いずれにしろ、それでは私を訴えると思っていた。

これをきっかけに、私たちのリスク論は知られるようになりました。発生源が分かっていたと、日本中が同じ条件だから騒いでも仕方ない、となったのでしよう。そもそも、リスクがゼロというのはありえない。どんな食べ物にも、どんな物質にも、健康へのベネフィットもある。健康へのベネフィットもある。どちらが大きいか勘案し、付き合っていくしかないです。

——多くの人がリスク論を学ぶべきだと思いますか

一般の人がよく分らないリスクを不安に思うのは仕方ないこと。外国でもパニックはあります。でも政治家とか官僚とか指導の立場に立つ人は、リスクの考え方を身に付けておいてほしいですね。

(聞き手・菱山哲平) 〓おわり



研究室にて (撮影・池辺貴洋)